

# PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1999年6月 No.104

## 胎児を守る運動

### あなたは命を選ばなければならぬ

二〇〇〇年に近付くにつれて、私たちが生活をしている世界そのものが戦争を行っている最中だろうと思われま

す。人間の歴史の中で、私たちは最も暴力的な時代に生きています。個人、性、家族、社会、人種そして国々の間の嫌悪感から起こる戦争、テロ、暴動、殺人、民族大虐殺…。今までにかつてないほど多く愛について語られ、一方で今までにかつてないほど嫌悪について語られています。今までにかつてないほど平和について語られ、一方で今までにかつてないほど暴力について語られています。今までにかつてないほど人権について語られ、一方で今までにかつてないほど人間の尊厳を恥知らずな踏みつける行動が行われています。

文明社会と文明国の本質的なものは、無防備な人の擁護、無力な人を助けるための準備、発言権がない人のために話す熱望です。だからこそ最も重い罪は、無防備で、助けを必要としていて、発言権のない人間を殺すこと、すなわち、まだ生まれぬ子どもの中絶なのです。世界中で、少なくとも六千万から八千万の子どもが産まれる前に滅ぼされていると推定されていて、インドの統計では1200万人程だと推定されます。

以上が人間の生まれる前のことですが、人間の生涯のもう片方には、経済的に生産力のない年老いて虚弱な人の

殺人、安楽死の脅威が広がっています。これらの人々は、もう「経済的に生産的」でないと考えられています。私たちが、年老いた親戚を持つ者は、みんなそのような人たちが多くの面で生産的であることを知っています。それは彼らの愛情の提供と私たちに愛情を表現する機会を与えてくれることです。

中絶と安楽死のことを考えると、私たちはかつての自分自身への闘いと、ある日、自分がなるものへの闘いが行われている、その中間にいる自分自身を見いだします。また、私たちは生命といのちの誕生に対して厳しくなっていく世界を見いだします。神の計画による性的親密さとは、夫妻間の愛情表現、そして子どもの出産のためのものなのです。

世界のことを考えると失望してしまいます。それは性的親密さを結婚による愛情と家族から除こうと努め、何気ないセックスと姦通の乱交に魅力を与え、避妊を促進し、自由という名のもとで性的逸脱を承認するものだからです。

これらは全て人間の威厳を卑しくするものです。これらは精神的にも、本質的にも、新しい生命に対して閉じられたものです。これらの内のいくつかが、例えば乱交や姦通は人間の命を直接かつ故意に奪う中絶へとつながる可能性があります。

また、同性愛と禁制のセックスはエイズなどのSTDの広まりの最大の原因なのです。私たちは生命への扉を閉じるとき、死への扉を開くのです。

神が人間を創造し、その中に命を吹き込んだとき、従順でなければ死をもたらずと警告しました。だいたい時が経ってから、神がイスラエル人をモーゼの指揮の元、エジプトの奴隷制度から導き出したとき、彼らに次のように言いました。「私は、生命と死、祝福とのろいを示した。生命の方を選べ。そうすればおまえも子孫も生きられる。それは神なる主を愛し、主の声を聞き、主と一致するためである。主はおまえの生命である。また先祖のアブラハム、イサク、ヤコブに与えようと約束されたその地に、どれほど長く生きられるかも主によることである。」(第二法の書 三十：19、20)。

キリスト教のいのちの尊厳への関心は、神の人類に対する愛の教えの中心的なメッセージから直接発せられてきます。「神は御独り子を与えたいほどこの世を愛された。それは、彼を信じる人々がみな滅びることなく、永遠の命を受けるためである。」(ヨハネによる福音書 三：16)

神の永遠の命の提供は、滅びの道と全くの対照にあります。天寿の中で、人間は生命の深刻な脅威に直面

します。その脅威とは、無視したり、消し去ったり、ましてや否定したりできるものではありません。それは現実なのです。神の教えはこれを認識し、私たちに認識するように願っています。イエスはこの脅威を故意の悪意と言います。「盗人は、盗み、殺し、滅ぼすためにだけ来る。」そして神の満ち足りた命の提供の対照としています。「私は羊たちに命を、豊かな命を与えるために来た。」(ヨハネによる福音書 十：10)

教会は、神の愛といのちの賜物を世界に知らしめようと働き続けています。教会の使命は死の悪霊に闘いを挑むことです。これは言葉と行為によって行われています。虚偽と欺きの価値を死の使いとして、そして避妊と中絶ではなく、生産的な他の選ぶ道を提供して、いのちに関する神の言葉を大胆にかつ愛情深く語ることで、なぜなら人間が真理を知るとき、真理は人間に自由を得させるからです(ヨハネによる福音書 八：32)。いつものように、このようなカトリック教徒の行動は、恒常的な祈りによって支えられなければなりません。

今こそ、私たちが中絶反対の使徒にもっと関わることを真剣に考慮する時ではないでしょうか。徐々に、多くの人たちが養成されるにしたがって、全ての教区に中絶反対センターを設置することが出来るでしょう。私たちは私たちの社会で、神聖な価値に富んだ、中絶反対文化を作り出すことが出来るはずなのです。

# 一人一人の価値

私達は二十年間里親として様々な体験をしてきた。非常に有意義な時もあれば落胆するよくなこともあったが、それぞれの体験にそれぞれの目的があり、思い出を残してくれた。

ある友人から一人の若い女性が妊娠しているが結婚はしていないという話を聞いた。その女性はとても有能な人だったが、子どもを産むにはまだ早いと感じていた。出産が近づくにつれ、子どもは養子に出すという話が進んでいった。

間もなく赤ちゃんが生まれた。医者から子どもには脳組織がないという話があった。あるのは



一筋の脳の茎だけだった。赤ちゃんは盲目で耳も聞こえず、何の反応も示さずに死に掛かっているとの話だった。この話を聞いた日のことは決して忘れることはないだろう。私は突如強烈な喪失感に襲われた。

その数日後、ソーシャル・ワーカーから連絡があり、あと数週間しか生きられない赤ちゃんがもうすぐ退院することになっていると聞かされた。赤ちゃんが他に行くところを探してやれるだろうか？ 保育園かどこがあるだろうか？ 適切な場所が見つかるまでの間わが家に連れて帰ることにした。

担当看護婦は、赤ちゃんを家に連れて帰るのは止めてと私に頼んだ。息子のマイケルが死んでからまだ一年もたっていないのに、と彼女は氣遣ってくれた。更にこの女の子には神経障害があるため常にわめくのだと教えてくれた。(当時その赤ちゃんはひどいわめき方をしており、生後ほんの数秒を除いてずっとわめき続けていた。)赤ちゃんは自分を大切にしてくれる周囲の人々に反応することもない。吸

い付く力もないので自力で栄養を取ることもできない。だからあの子にとつて家族はいよいよとしまいと関係ない、と看護婦は言うのであった。

その美しい髪と目を持ったわめく赤ちゃんを私が抱き上げる。と突然その子は泣くのをやめた。家までずっと抱き抱えていった。すると看護婦が心配していたほどわめくことはなかった。初めは十分な栄養をとることができなかったが、時間をかけて努力した結果、適量のミルクを飲むようになった。

赤ちゃんが十五ヶ月になった時、私達は彼女を正式に養子として迎えたいと法廷に申し立てた。彼女に法に基づいた名前と家族を与えてやりたかった。それ以上に私達は彼女を愛していたのである！二才の時には自分の知っている人にそれぞれ違う



方法でお気に入りの反応の仕方をするようになっていた。彼女の回りのことに気づかぬふりをして過ごしていた時期とは一体何だったのだろうか。四才の時には彼女は私達を「通して」ではなく私達の「こと」を見るようになっていた。

奇跡が起きたのだ。メリッサは今十三才。発育の面から言えばまだ三ヶ月の赤ちゃんと同じで辛い日々もたくさんある。しかし、彼女は社会的にも立派な美しく繊細な女の子で、正常に近いサイズまで成長していた(正常なサイズは不可能だと医者は言っていたが。)そして、とても明るい子だった。滅多に泣くこともなく、いつも微笑んでいた。特にピアノやフルートなどの音楽を聴くとこきげんだ。

彼女は私達家族のみならず彼女を知る人みんなにとっての喜びとなった。彼女は人が大好きだったのである。

メリッサに心を動かされた人は大勢いる。未婚の母が何人か一緒に暮らしたことがあるが、彼女達は段々命の本当の姿を見るようになり、本当は何が一番大切なのかを知るようになった。メリッサは本気で学ぼうとしている人々に物事を見抜く力を与えていた。彼女を愛することは名誉であった。

私達家族は全ての人間の価値

について多くを学んだ。苦しみに死んでいく子どもよりもひどいのは、子どもがそのような状況をたつた一人でくぐっていかなければならぬことだと私は知った。愛情、神の愛に比べられないほど能力のない子どもなどいないことを私は確信した。ここにいる赤ちゃん達は全く反応しないという説明を医者から受けている間、私は腕の中でほつとしている堅くて小さな体を感じた。このような子ども達は子宮の中で守ってやる価値はないという人もいるだろう。実際、出産後に社会から拒絶される子どもいるのだから。だが私は知っている。神は決してこの小さな子ども達を拒絶することはないというのを。

この子達こそ天使の知恵と勇気を持った教師達なのである。

レイチェル・ジンダー著





# 子どもをまっ一人？

何年間にもわたって知れ渡った自然な家族計画の効果によって、夫婦は、もう一人子どもを作るかどうか判断する上で、様々な選択が出来る様になった。

普通はその判断に、「経済的な余裕があるかしら？」という疑問が浮かぶ。答えは「ないだろう」である。私達が新聞で読む、子どもを大人になるまで育てる費用の統計には、肝をつぶされる。どうしてそんな数字が出るのか、不思議に思った事はないだろうか？一番高いお店での買い物しか考慮されていないのではないか？毎年自転車を買って換えるとか、毎年2月にデイズニールランドやハワイに旅行するとか、完全にしつらえた部屋を、子ども達一人づつに与え

なければと考えているのではないだろうか？「お下がり」の服や、家族のキャンプ旅行、お母さんが家で縫い物をして料理して子育てする事、それに場所を作る為の二段ベッドなんかは、考えられていないのであるか？「もう一人の子どもを作る経済的余裕はあるか」は、概して比較上の問題なのである。

もう一人の子どもを育てるに当たって、両親は、感情的、又は心理的に準備が出来ているであろうか？おそらく両親それぞれの気持ちの中に時々、はたしてストレスに対処出来るか、という疑問が浮かぶであろう。時には私達は、子育てに嫌気がさし、自分が不適當に感じ、とても欲求不満になる。しかし、難しい時

がある様に、私達の子どもの存在そのもので喜びが溢れている時もあるのである。ありがたい事に、自然な家族計画では、妊娠を避ける選択は、永久的である必要はない。一ヶ月や一年で、考えを変える自由があるのである。

もちろん、世間には、この世はずでに人口過多だという意見がある。

私達に七人目の子どもが出来た時、夫の同僚は、この世にはもう人間が多過ぎると思わないか、と夫に聞いた。夫の短い答えは、「私達が育てている様な人間は足りないよ。私達の子ども達は地球を救うんだ。」

この大陸に残されている空いている土地、なだらかに起伏する丘、見渡す限り人の居ない土地、又は、世界にある大きな差別、一つの国や、その一部だけが非常な富を持って暮らし、別の地域では究極の貧しさの中で暮らす、そんな事を考えずにいられない。私達の子ども達は、富を

分け与える様にと、世界を導けるだろうか？もし彼等が限られた家族の資源を家庭で分け合う事を学んだら、おそらくそうなる可能性は大いだろう。

私達の六人目の子どもが生まれた時、「これで終わり」と私は決めた。

私はしばらく、肉体的にも精神的にも消耗しきっていたのだ。私は「生命に貢献」してきたと感じ、自分の精一杯だった。もう一人欲しいという夫の控えめなヒントは上機嫌で受け入れたが、でも真剣に取らなかつた。私はすでに、おばあさんになるのも悪くないな、と考えていたのであるから。

私はありえない事を祈っていた。もし神が私達にもう一人の子どもを授けたかったら、神は私の心を変えて、実際に私に子どもを望ませなくてはならない、と祈った。

一ヶ月で、私は完全に考えを変えた。又赤ちゃんを目にする事で、私

の母性本能が刺激され、神は私達にもう一人子どもを授けたがっていらつしやるな、と疑いなしにわかつたのである。もちろん経済的な余裕はない。もちろん広い場所もない。もちろん現代の基準で言えば、私は歳を取り過ぎている。

でも、命の創造者に耳をかさないなんて事が出来るだろうか？神は数え切れない程、私達にやさしさと愛を示してくれた。神は一番良い事をご存じで、細かい部分まで私達を気使って下さって、絶えず安心させて下さっている。

もう一人子どもを作るかどうか判断するに当たって、沢山の大切な要因がある。しかし一番大切な要因については、しばしば見逃しがちである。新しい命を作るには、三人が必要だ。一番大切な一人である神がその決断に関わる、という事は、絶対必要な事であると思われる。

メアリー・ガイター

## 僕達の子どもの事を話してほしい

僕達の子どもの事を話してほしい。  
考えた事がないなんて言わないでほしい。  
いつも考えていた事を知っているんだ。  
だから話してほしい。  
お願いだから。  
知らなければならぬんだ。  
僕達の赤ちゃんは男の子だった？  
それとも女の子だった？  
もし生まれていたら、  
どんな子だったろうか。  
その子は君が抱いた時、笑ったろうか。  
安らぎと愛情を感じた暖かい瞳をして、  
小さな手を伸ばしたろうか。  
その子の体重はどのくらいだった？  
君もその子もだんだんと大きくなって、  
その子を宿している事はそんなに  
大変だったかい？  
そうしたことで君は一人の女性として  
もっと女性になれましたか？  
その子の髪の毛は何色だった？  
その子の瞳は何色だった？  
君のおなかの中で君を蹴った？  
その子の事を考えた事がないなんて  
言わないでほしい。  
君が考えていた事は知っているから。  
あれからずいぶん考えていたのは  
分かってるよ。  
だから話してほしい。  
知らなくてはならぬんだ。  
知らなくてはならぬんだ。だって  
僕はその子の父親で、  
その子の事をずいぶん考えていたんだ。  
毎日。  
君が僕のもとを去っていく前から。  
僕は知っているんだ。  
僕達の赤ちゃんがいなくなる事で、  
君の心に、  
僕以上の穴がぽっかりとあいて  
しまった事を。  
その子は君のおなかにいたんだ。  
でもその子は君のおなかから引っぱり  
出されてしまったんだ。  
僕は分かっているんだ、自分が今言っ  
ている事が本当だって事を。  
だからそれを否定しないでほしい。  
僕は知らなくてはならぬんだ。  
そして君も知らなくてはならぬんだ。

「この詩は若い独身の男性によって書かれたものです。  
彼の恋人は彼に相談しないで中絶したのでした。」

# 男性には中絶は暗黙な苦悩

## 「中絶経験で傷つけられた父親達の描写」

中絶についての議論において明らかに欠けているのは、第三者、父親達の考慮である。文献を調べてみると、中絶の問題は二つの部分の対立—胎児の権利対母親の権利—として見るべきであるとほとんどの著者は暗黙の内の仮定を示している。そして二つの権利のバランスへの的確な分析が、中絶が道徳的に許されるという条件を決めるのに有効であると示しているのである。アメリカの最高裁判所は、夫には中絶する妻より先に、通知さえされる法的権利が無い、と公式に判決を出している。

性は、女性と同じ程度の感情と動揺で中絶を経験し、同時に相手への同情と、命を摘み取った罪の意識と間違いを犯したという悲しみを、あわせ持つという。

精神科医のリチャード・エプスタインは、男性が中絶を経験するにあたって心理学的に反応すると言う。例えば、彼が愛する女性に与えられ得る最も大切なものが消失する事により、ひどく拒絶されたと感じ、深いうつ状態に陥る可能性がある。女性に対する支配力を重要視する男性は、中絶によりそれを失うと受け取るかもしれない。又、女性の関心の中心に居たいという望みから、中絶に賛成するかもしれない。逆に、子どもを育てる事によって自分の一部を残し、引き継がせ、自分自身が生まれ変わるという機会を失ったと悲しむかもしれないのである。

### (A) 価値観の危機

同じ様に、医学的あるいは社会的な文献には、中絶が男性へおおよぼす影響について少ししか載っていない。限られた資料を見ると、優しい男性は誰でもその経験によって傷つけられ易いとしている。中絶を経験した父親達の話は最近になって出て来ており、それらは潜在的に傷つけられる影響が起こりうる事を確証している。

男性達は中絶にどの様に反応するのか？精神科医のニール・バーンスタインによると、男性は「否定と敬遠」という反応をよくするそうである。彼によると繊細な男

「命がいつ始まるか、中絶は正しいか悪いか、誰の判断が正しいか、自分は考えがまとまっていなかった。」というのは、中絶を選んだガールフレンドを持つ、中絶の

知識が無い男性達の言葉である。予定外に妊娠した時、ほとんどの男性達が命がいつ始まるか、中絶は正しいか悪いか、について考えた事がないのは明白である。ウィスコンシン中絶クリニックでの男性の為のグループカウンセリングのプログラムでは、主な議題は、

1) 特に宗教的に正しいか悪いか  
2) 胎児は人間かそうでないか  
3) 果たして子どもをこのように「乱れた」世界に送り込んでいいのかどうか、である。

### (B) 子宮内の命の人間性

中絶経験した男性の多くは人間の命が消失したと考える。アイサー・シヨスタックによる一九八一年の調査では、中絶クリニックの千人の男性の内、命が始まるのは20%が受精の瞬間から、19%は神経組織が出来てから、と信じ、26%が中絶とは子どもを殺す事と感じ、32%は中絶が子ども殺しかどうかわからないとした。

コネクティカット中絶クリニックでの60人の男性（内66%はカトリック信者）を対象とした調査によると、多くが当惑し落ち込んだ

という。「妊娠して命が実際始まるのはいつだと思つか」と聞かれ、男性達は様々な答えを出した。22%は受精の瞬間から、12%は妊娠—十二週目から、25%は十三—三十六週目から、20%は出産の時から、そして22%は無回答であった。女性の中絶の決断についての男性の態度は、あいまいなものから断固としたものまで幅広い。

### (C) 人間である事/父親である事の損失

中絶は、父親の持つ衝動力の中で最も基本的なもの—自分の子どもを守る—toする人間の本能—をなくしてしまう。ある中絶経験者の男性はこう言っている。「あるものを失っただけでなく、自分自身が失敗者になるのです。生きている上での自分の一番の役目とは、家庭を築き守る事です。そしてあの中絶されてしまった子ども達も自分の家族であったのに、守れなかった。彼等は死んでしまい、自分は生き残っているのです。」

しかし、ヴィンセント・ルー博士が言う様に、「生かすか殺すかの決断に關与する事を法律によって許されていない男性が、どうして子どもを守る事が出来ますか？知識が意図的に隠され、男性が役目から外されるのが社会的に認められてしまっている時、どうして責任を持つ事が出来ますか？」

もう一つの大切な面は、時には

永久的に続く、父親になる事の意識の損失である。十年前に自分の恋人の中絶にお金を払い、その事を今でも気にしているある中絶経験男性は、「私は子どもを持った事がない。一子どもを持たないと思っ」と言っている。

又、別の人は、「私は今だにひどく後悔しています。罪の無い女性をひどい目に合わせてしまったからだけではなく、今、子どもを持って父親になりたいと思っても、自分が失ったものかどんなに価値あるものだったかを考えてしまうからです。そうすると非常に悲しくなります。よくわからないけれど、もっと何かするべきだった、何か言うべきだった、共に居るべきだった、と心から思っています。」と言

三番目の男性。今、39歳の彼は、十年前前に彼女と決断した中絶について、良かったのか悪かったのかわからない気持ちで思い返す。「二人ともその時は子どもを持つ時期でなく環境も整ってない、と合意したのである。そして今になって彼は結婚できない、子どもが持てない、と恐れている。彼は子ども（彼は男の子だったと思っ）と分かち合ったであらう親子関係、愛情、楽しさを空想するのである。

四番目の男性は28歳の子ども



のいない黒人で、五年間一緒に暮らした女性が中絶しようとするのを止めさせよう、と中絶クリニックに現われた。彼にとつて中絶や父親になる事は、支配力やプライドの問題だとしている。彼にしてみると中絶とは、男らしさの本質を侵害するものなのである。又、彼は、伝承や彼自身を永続させる事の大切さの意識を持っていた。

### (D) 中絶による罪の意識

男性の罪の意識は、男性が責任を感じる女性の妊娠からくるのである。又、中絶により命が奪われるとわかっていながら、罪の意識を持つのである。

何人かの観察者は、女性より男性の方が中絶に対する強い罪の意識の反応を持っていると結論付けている。ロサンゼルスタイムズでの電話調査により、中絶された子どもの父親である事を認めた男性の内、2/3近い人が罪の意識を感じ、三人に一人は後悔している事がわかった。同じ調査で、中絶された子どもの母親である事を認めた女性の内、56%が罪の意識を感じ、26%が後悔している事がわかった。

中絶による罪の意識は何年間も続く事がある。以下の話は、ロードアイランドはプロビンスのラジオ局で放送されたものである。中絶に対する男性の感情についての朝のトーク番組に、ラッセルとい

う名の男性から電話がかかってきたのである。

ラッセルは七十過ぎである。一九四二年に彼は独身のノルウェー人の女の子と関係をもち、結果として彼女は妊娠した。ラッセルは結婚していた。その子は名門の血統を持つ家の出だった。二人は解決法は中絶しかないと決断したのである。

ラッセルはカリフォルニアの医者として手はずを整えた。二人が到着すると医者は、今日は看護婦が休みだと説明し、ラッセルに手伝ってくれと頼んだ。ラッセルは承知して、美しい、六ヶ月の金髪の男の子の誕生を見る事となった。

赤ちゃんが産まれると医者はラッセルに後ろを向く様に言い、赤ちゃんを殺す処置をした。ラッセルも彼女も、この体験に完全に打ちのめされてしまった。彼等はもう二度と会わない事で合意した。

罪の意識に力尽き、ラッセルは奥さんに話す事にした。奥さんは愛と同情を持って聞いてくれた。彼女は、「もしその当時にその事を知ったら、喜んでその子を自分の子どもとして育てたのに」と言った。その後ラッセルと奥さんは四人の子どもを引き取った。

ラッセルはトーク番組の司会者に、四十年経った今でも、彼は大きな罪の意識に苦しんでいると話した。彼はこの話…奥さん以外の誰にも話した事のない話…を終

える前にすすり泣き、感情を抑え切れなかった。

### (E) 人間関係・親交の損失

以下の例に見られる様に、中絶に強く反対する男性は特に、自分の知らない所で中絶が行われていたら、ひどくショックを受けるであろう。

「三月に私の妻は妊娠しました。それは予定された妊娠ではありませんでした。妻は、ビルは気持ちが悪くなるから、EUDは痛いから、と何の避妊もしていなかったのです。

彼女は自分の歳を考え(33歳)又すでに三人の子どもを育てた(8歳、15歳、前の結婚から)という事から、そして50代後半になってまで子育ての苦労はしたくない、と子どもを欲しがりませんでした。彼女の会計士としてのキャリアも始まったばかりだったので。

私は強く言いました。彼女を愛していると、いつしよに子育てすると、そして私はすでに赤ちゃんを愛し始めていたのです。

六月に彼女は私の同意もなく、知らない内に中絶してしまいました。妊娠中の彼女は具合が悪く落ち込んでいたのですが、中絶した日には陽気になり、逆に私は悲しく怒りを感じ、涙を流しました。何ヶ月もの間私は中絶について自分の気持ちをコントロールしよ

うと努力しましたが、仕事でも旅行中も家に居ても、その事を考えずしてしまつたのです。妻と話し合った時、この事を「殺人」と呼びました。中絶が、自分がコントロール出来る以上に、私の彼女への気持ちに影響していたのに気がきました。

結婚生活は十二月に離婚という形で終わりました。その時点まで妻を深く愛していましたが、中絶によって我々の愛が失われた、とどうしても思われてならないのです。」

中絶の後に恋人との関係が失われてしまつたのはよくある事である。リンダ・バード・フランクは、中絶の調査の中で、「ほとんどの独身同士の間の関係は、中絶後あるいは中絶の前に壊れてしまつた。」と報告している。別の研究では、中絶を選んだ二百五十人の女性の

内の半分近くが、子どもの父親との関係を終わらせている。ニューヨーク市中絶クリニックで行われた研究では、中絶後一ヶ月で70%の男女関係が壊れたとわかった。又、別の研究によると、中絶後の何年間も父親にあたる男性といつしよに住んでいる女性は、たった10.3%だった。

何故これら男女関係はすぐに壊れてしまつたのか?心理学者ピンセント・ルーはそれを、しっかりといていない男性が増えている事、中絶による男女関係の不安定さから来る疎外感や役割についての衝突である、と指摘している。社会学者のアーサー・シヨスタックは、

予期していなかった罪の意識と後悔、緊張からの解放、そして女性への怒り、が男女間の壊れてしまつた大きな原因であると見ている。又、セックスの関係や避妊の問題も、中絶の直後から新しいストレスを生み出している。心理学者の

アーノルド・メドウィーンは、中絶とは間違いなく死の経験であり、それが解決される事なく心の中にどどまってしまうと、男女関係に破壊的な影響を与えてしまつたのは確かである、と言っている。カウンセラーをしていてるテリー・ライサーは、中絶に続く男女関係の崩壊の一番大切な要因は、女性の幻滅を感じる経験と、男性が疎外感から心が離れてしまつた事であると考えている。



# チャールズ・ヘストン

## 中絶反対問題について語る

多くの人がドクター・バーナード・ネイザンソンの「イクリプス・オブ・リーズン」という映画をご存じだろう。これは「沈黙の叫び」という映画の続編で、妊娠5ヶ月くらいに行われた中絶の話である。この作品にはすばらしい導入部分があり、それはチャールズ・ヘストンという有名な俳優によるものであった。以下がその導入部分である。

『この国には毎年15万件を越える心臓切開手術が行われていることをみなさんご存じでしたか？おそらくご存じでしょう。テレビでは関連したドキュメンタリーをたくさんやっていきますからね。シングルあるいはダブルのバイパス手術が行われていて、何人の命が救われたかということをお私たちは知っているのはよいことだと思えます。』

ところが、現在アメリカで最も頻繁に行われている手術は、妊娠中絶手術なのです。これは命を救うものではありません。この国では毎年150万件の中絶が行われています。これは心臓切開手術の10倍にもなります。さて、中絶手術は平均的には5、6分で終了するものですが、実際の模様を完全にテレビで見た人はいません。これはよくないことです。テレビが伝えなければならぬことに、人々が気にかけている問題を探求するということがあるはずですが、中絶も当然その一つです。わき起こる感情、中絶問題に関する熱い議論、安全性、道徳性、長期的結末、これらすべてが一般の人々にとってはどんな外科手術よりも強い関心をもたらしめているのです。

政治家たちは、心臓バイパス手術に関して意見を明確にしないことが望まれています。アメリカ最高裁は未だに心臓移植の合法性を決定していません。人工心臓に抗議して何干という人々がデモを行うことなどないでしょう。でも新聞やテレビは中絶のことよりも心臓手術に関する情報ばかりを伝え続けているのです。

マスコミはその使命を果たしていないと私は思います。つまり、一般大衆が中絶に対する最終判断をくだせるよ

### 【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

### 【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの？..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたか..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

### 【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料

### 【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド.....(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [404] いのちのちーおくりもの.....(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの=one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる？天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [500] (本)生命問題に関する...(カトリックの教え).....2987 + 郵送料
- [501] (本)自然な家族計画...(ビリングス・メソッド).....1000 + 郵送料
- [503] (本)プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本)小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本)いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本)命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
- [507] (本)私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本)いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本)小さな生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本)赤ちゃん：最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
- [512]本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513]本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514]本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本)経口避妊薬：ピル.....100 + 郵送料

### パンフレット申し込は・・・

1 ~ ~ 5	1部 = 35円
6 ~ ~ 100	1部 = 25円
101 ~ ~ 500	1部 = 20円
500 ~ ~ 以上	1部 = 15円

組み合わせは自由です

うにするための情報提供をするという責任をきちんと果たしていかないのです。今あなたがテレビでこの私を見ているとすれば、それは彼らが事実を伝える責任を受け入れたということになります。これから始まる映画はとも写実的に描かれていきます。生々しすぎると感じる人もいるでしょう。血もあれば死もあります。過去にはヨーロッパの死のキャンプに関する恐ろしい映画もありました。またヒロシマのぞつとするような犠牲者の映像もありました。私自身、エチオピアにいたことがあります。そこから送られてくる飢えに苦しむ赤ちゃんたちの映像を悲痛な思いで見た人も大勢いるでしょう。

さて、この映画に出てくる赤ちゃんたちはおなかをすかせてはいません。でもそれ以外の恐ろしい姿をみることは、人々にとって当然の権利だと思えます。犠牲になった人々をそれぞれが知る権利です。

ノーベル賞を受賞した際、エリー・ヴィーゼル

氏は言いました。「人々が苦痛や屈辱に耐えなければならぬ状況において、私はどんなときも、どこにいようと、決して黙殺しないことを誓います。私たちは必ず一方の味方をしなければなりません。中立の態度は、必ず犠牲者ではなく抑圧者を助けることになり、沈黙は苦しめられている人ではなく苦しめる人に自信を与えてしまうからです。」

今まで、犠牲者に代わってこれほどまでに雄弁に語った人はいません。一九七三年以来、中絶による罪のない犠牲者は2000万人以上もいるのです！この映画は彼らのことを語っています。沈黙を止めなければいけないのです。私はチャールズ・ヘストンさんに感謝したい。生まれてくることのできなかつた子どもたちのためにこの証言をした彼の勇気と貢献を非常に立派だと思っています。

ジョン・C・ウィルキー 医学博士

[511] 赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅 [514] 経口避妊薬：ピル

注文：	1 - - - - 5	1部 = ￥100
	6 - - - - 20	1部 = ￥75
フルカラー	21 - - - 999	1部 = ￥50
	1000 - - 以上	1部 = ￥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科



## 重荷などで決してない

お父さん、お母さんへ、

私がこんな手紙を書くことになるのは、思ってもいませんでした。私は、子どもたちが親を深く愛し、親のためなら何でもするという口にするこののい絆があることを親は知っているとつい推測してきました。しかし、「死の補助」と呼ばれるものを合法化しようとする運動に関するニュースを見、人々が他の人（主に年寄りか不治の病の人）の自殺を助ける「権利」と想定されるものをやかましく要求するのを聞く度に、私の心の中をあなた方と分かち合う必要があると気づきました。

人々が自殺補助を支持する最も一般的な理由は、自分が家族にとって重荷になりたくないというものです。この思いが、あなた方にも現実的であることは、私にも良く分かります。「もし、私の死ぬ日が近くなったら時は、自殺補助をお願いします。その方が私たちの全財産を使い果たし、家族に自分の死にゆく姿を無理矢理見せるよりも良いからです。」とあなた方は私に言いました。

私が高日この手紙を書いている理由は、いくらあなた方の世話をすることが重労働で、眠れぬ夜を伴ったとしても、私は決してあなた方を重荷だとは思わないということをお分かっただけです。人間は決して「重荷」であることにはないのです。人間は尊厳を持った存在なのです。自殺補助と安楽死は慈悲深いものなどではありません。それよりもむしろ、身勝手な行動であり、私たちの人間性を奪い取るものなのです。お父さん、お母さん、あなた方は決して「重荷」になることありません。あなた方は常に私のお父さん、お母さんなのです。

あなた方は私にたくさんのものを与えてくれませんでした。あなた方が私の生活が良くなるようにと無私無欲で下さったことを数えることができません。あなた方は自分たちを犠牲にし、働き、心配し、愛してくれました。私にもあなた方のために同じことをさせて下さい。愛情を与えて下さい。自分を犠牲にさせて下さい。いかに私があなた方のことを気にかけているかを示させて下さい。お願いですから、こういう機会を私から奪わないで下さい。

私たちは皆、生活する上で簡単な行動をするにも、人の助けを必要とする者としてこの世界に産まれてきます。食事を与え、歩き回る手伝いをしてくれ人が必要でした。私たちがこの世界から去る準備をする時も、多くの人が似たような助けを必要とするのです。何故人々は、私たちが人生の終わりに人の助けを必要とすることを、尊厳を失うことと考えるのでしょうか。それは人生の道のりでの自然なことなのに。今、私たちが自分たちで食事をし、自分で排泄の処理をできるかどうかで、尊厳が保てるかどうかを判断する人が増えているように思います。そういう人たちは、全ての人間を固有の尊厳と計り知れない価値を持つものとして見ないのです。

時々、あなたが何を保持しているかを感じさせようとする時、非常に悲劇的で怖いものを伴うことがあります。自殺補助に関する議論を通して、私は自分の死の宿命と私が愛する人たちの宿命に直面することになりました。お父さん、お母さん、あなた方を失うことを考えると私は怖く、そして悲しくなります。しかし最も私の心を動揺させるのは、あなた方が世話が必要な時に、私が世話をするチャンスを与えられないこと、あなた方が愛情を必要としている時に、私が愛せないこと、あなた方が今まで長い年月を掛けて私に与えてくれた愛情の少しでもお返しすることができないことなのです。

最も厳しい時期においてさえも、あなた方の命が私に重荷になるなどは絶対に考えられません。これだけは覚えていて下さい！私たちが共に過ごした貴重な時を私たちが奪わないで下さい。私自身のちよっとした方法で、私にあなた方にとってキリストにならせてください。私があなた方のために働き、あなた方をどれだけ愛しているか表せる機会を得たことを喜ぶことによつて、キリストのような存在にならせて下さい。

お父さん、お母さん、あなた方はとても強いです。あなた方は私に人生の挑戦に直面する方法を教えてくださいました。私たちの神がこの不完全な世界から私たちを呼び出して下さる時が近付くにつれ、あなた方が弱くなった時、私に強くならして下さい。あなた方をどれだけ愛しているかを示させて下さい。

愛を込めて

## 事務所便り

私の手

誰にも負けない大きな手

…（中略）…

父の手も大きかった

仕事は売りものだからと

ア力切れだらけの大きな手で

働きづめに

しあわせとは、言えない生涯だった

父ゆづりの私の手

篠原 衛『高知詩集』より

皆様、お元気で過ごしてでしょうか。六月には父の日があります。皆様の父親へのイメージはどのようなものでしょうか。また、子どもにとって父親はどのような存在なのでしょう。

母親は常に子どものそばにいたことが多いたのですが、家族のために働くお父さんは子どもとの接触をなかなか取れないのが今の父子の姿に思われます。だから、それだけに、子どもにとって、お父さんと過ごした、短い時間の一駒一駒が心の深みに染み着いて、大人になっても、決して忘れられない思い出として残るものでしょう。

たたみの上でお父さんと取った相撲。小さいときは10回とも勝ったのに、幼稚園に行く頃、小学校に行く頃：段々大きくなるに従ってお父さんに勝てる回数が少なくなっていく不思議さ。男の子は自分もお父さんになったとき、このなぞを理解して、我が子に自分のお父さんの後を辿っていくことでしょう。

日本プロ・ライフ・ムーブメント